

脳における エストロゲンの見えざる作用 —妊娠・出産によって脳が変わる—

東京大学名誉教授
医療法人社団レニア会アルテミスウイメンズホスピタル理事長
武谷 雄二

はじめに

女性にとって母親になるということは、育児を通じてこれまでに経験したことがない役割を担うことになる。すなわち子どもを庇護し、社会的に独立した個として生存するために大きな支えとなることである。また育児によるストレスを軽減、回避するために多くのことを学ばなければならない。さらに育児を通じて子どもの存在を何事にも優る喜びと感ぜられるようになり、そのことでこれまでと異なった価値観や人生観を抱くようになる。このため出産は女性にとってアイデンティティシフト(identity shift)の時期といわれている。一般的にみられる本能である異性との接触、食欲、危険の回避、社会的優位性の追及などとともに、母性本能はヒトをはじめとする多くの哺乳類にとって脳内に刷り込まれた生来的な性質であり、これなくして種が存続することはありえない。

われわれは日々の生活でもさまざまな体験を通じて学習していくが、多くは失敗を通じて体得することが多い。しかし育児においては、失敗は許されない。つまり出産を契機とした行動特性や精神機能の変化は、絶対過ちを起ささないような仕組みがあるのだろう。しかも短期間で起こるものであり、長期間持続する。このような変化は日

常での試行錯誤を通じての顕在意識下での学習による行動変化では説明ができず、潜在意識下での劇的な変化が脳内に生じていることがうかがえる¹⁾。

男女を問わず出産後にみられる特有な認知行動の急激な変化は出産以外には例をみない。またその変化は永続性があるという特徴がある。エストロゲンへの曝露が劇的に変化する思春期や閉経で、脳の変化が観察されている。したがってエストロゲン作用が激変する妊娠・出産でも脳神経組織の改変を伴っている可能性が高い。事実、最近の研究でも妊娠により思考、感情、意思、信念などに関わる脳内の特定部位の構造が変化していることが明らかにされている。妊娠・出産によっても脳がいかに変化するかを調べることは、産後の精神疾患や児童虐待の予防・治療にもヒントを提供することが期待される。

母親の育児行動がヒトの 知能の進化につながった？

動物としてのヒトはまずヒトという種や部族を後世に残すことに力を注いできたことは当然であり、その結果人類が現在地球の覇者となっている。ヒトが文明を築く以前には、頭を使う対象は主に効率的に食料を確保することと育児の2つで